

署長は氣嫌をとつて、新吉は又中山の驛まで歩るいて行つた。

乗客は割合すけなかつた。

ひがしかながわで乗り換える時、マントを着た巡査が一人、向ふ側の廓臺に立つてゐた。

新吉は東京行の汽車に飛び乗つて川崎で降りた。

そして辻潤の宅へ駆け込んだのである。

虎口を脱した思ひがあつた。

羽織はホコロビ、着物の裾は泥だらけだつた。

南無觀世音菩薩。

コシマ・キヨが二階から降りて來た。

「大變なもんだね」辻潤は言つた。

鐵の矢立を辻潤は机の抽斗から出してくれた。

川崎の高等刑事が、君を訪ねてゐたと言ふ。

之さへあれば巡査が來ても氣絶さす事は出来る。